

家庭科教員志望者の家庭科観と生活経験の関連

木村典子*

Pre-service Home Economics Teachers:

The Relation between Their Views of Home Economics and Life Experience

Noriko Kimura

要 旨 家庭科教職課程履修者の家庭科観と生活経験の関連を研究する。「家庭科」のイメージは生活に必要で役に立ち、楽しく、知識と技術を習得する、実習の多い教科である。しかし生活の範囲は狭く、学ぶ内容も家族・家庭、食生活、衣生活の3項目に集中しており偏りがある。生活経験と家庭科内容のイメージには関連があり、生活経験の豊かさは教科観構築につながる。生活体験が生活経験に達しておらず、できることとできないこと、できる人とできない人の二極化と、他者依存の生活態度がみられる。地域の生活者ではなく、他者理解も浅い。以上の学生が家庭科教師に成長するには生活経験を豊富にして生活視野を広げ、生活の確立と他者理解を深める必要がある。そのために大学の家庭科教育は①体験と知識を経験にする②積極的体験に移行する③経験の過程を経る④生活経験から教材を発見する⑤他者との交流を豊かにする⑥長期的生活を視野にする⑦家庭から社会と社会から家庭をみる目を養う⑧生活主体の自覚をもつ⑨家族と社会への甘えを絶つ⑩自分育てと他者育てを並行する⑪一人暮らしを意識した学習展開が必要である。

キーワード 家庭科教育 (Home Economics Education) 家庭科観 (Views of Home Economics)
生活経験 (Life Experience)

I はじめに

家庭科の教師をみざして教職課程を履修する大学生が、教科「家庭」に対してどのようなイメージをもち、学習の対象と考えているのかを把握することは、家庭科教育を開始するうえで必要である。

学生は過去の経験と書籍等の知識から家庭科の授業づくりを試みるが、教科のねらいや範囲の確認は甘く、思い込みや偏りにも気付かず、生徒を考慮する余裕もなく一方的に推し進め、生徒に受け入れられない授業に困惑している。

そこで教職課程履修学生の「家庭科観」と

「生活経験」には関わりがあるのではないかという推論から、家庭科観と生活経験の関係を調査をとおして明らかにし、問題点を整理する。そのうえで大学の家庭科教育指導上の視点を述べる。

本研究は文化女子大学紀要服装学・造形学研究36集・37集において、自立力と共生力を育てることをねらいとした高等学校の家庭科教育を実現する方法として、「消費すること」を軸とした授業を提唱したその延長にある。学生を自立力と共生力の指導ができる教師に育てるために、その初歩的意識を確認し、学生時代の学習の方向性を示唆することを目的とする。

* 本学助教授 家庭科教育

II 調 査

1. 調査対象

平成17・18年度文化女子大学服装学部2年女子。家庭科教職課程履修者。家庭科観と生活経験の調査対象者は同一者である。(表1)

表1 調査対象者

	家庭科観	生活経験
平成17年度	57人	61人
平成18年度	52人	50人
計	109人	111人

2. 調査方法

「家庭科」を教師の立場で学び始める大学2年生の4月、専門知識の学習前に、家庭科観と生活経験の調査質問紙を配布し、記入後回収する。

(1) 家庭科観

家庭科に対する教科観、指導観、教材観、授業観、生徒観を調べる目的であるが、「家庭科観」という言葉に馴染みのない初歩学生なので、家庭科をどのように感じているのか、イメージをもっているのかという間で調査する。

家庭科のイメージを、「家庭科は『 』である」という文章で表現する。『 』の中に25字以内の文を3文章作る。3つの異なる意味を表現することも、類似事項を言葉を替えて表現することもできる。少なくとも6年間の家庭科学習の思い出と感想が重なり、肯定または否定の文章として表現されると予測する。選択肢の言葉にイメージを合わせるのではなく、自由な表現を期待する。集計はキーワードと内容から読み取り分類する。

(2) 生活経験

「他者と共生して生きる」と「個人の生活の自立」を「家庭科」のねらいとして、それらと関わりのある具体的な生活行為を調査する。回答は「A 経験がある・できる・知っている等」

「B 経験がない・できない・知らない等」の2者択一である。さらに各設問に自由記述を設け、経験の程度や内容を記入する。A または B の回答は割合で表し、自由記述はキーワードと内容から読み取り分類する。

3. 調査結果および考察

(1) 家庭科の家庭科観

家庭のイメージは「教科のイメージ」63%、「学ぶ内容のイメージ」33%、「授業感想と先生の印象」4%に大別できる。(表2)

「教科のイメージ」は「生活に必要な(22%)で、役に立ち(9%)、重要(8%)で、楽しく(8%)、知識と技術を習得する(6%)、実習の多い(3%)教科」である。「生活」という言葉が多用され、生活に必要なことを学ぶ教科、生活を見直し豊かにする教科、生活に関係の深い教科であると認識している。

「学ぶ内容のイメージ」は「他者と共生して生きる」に関するものが13%、「個人の生活の自立」に関するものが20%で、「個人の生活の自立」を学習内容と認識している者が多い。「学ぶ内容のイメージ」を「高等学校学習指導要領普通教科家庭『家庭総合』」の内容項目と比較する。(表3)

「人の一生と家族・家庭」(32%)、「食生活の科学と文化」(32%)、「衣生活の科学と文化」(21%)の3項目に該当するものが学ぶ内容のイメージであり、「子どもの発達と保育・福祉」「住生活の科学と文化」をイメージする者は極めて少なく、「高齢者の生活と福祉」「消費生活と資源・環境」は学ぶ内容としてのイメージがない。「家庭総合」の内容と比較すると項目間の偏りが大きい。しかし、共に生きることを学ぶ、命の大切を学ぶという根本的なねらいを掲げる者もおり意識の差はみられる。

家庭科教員を志望する学生なので、前向きなイメージが大半である。しかし、実習以外は楽しくない、講義が眠い、手抜きができる、真面目に取り組む人が少ない、等否定的な感想もある。本人の意識だけではなく、仲間を観察した

表2 家庭科のイメージ

イメージ分類		%	延人数	イメージ分類詳細	延人数	
教科のイメージ 63%	生活に必要な教科	22%	94人	生活に必要なことを学ぶ教科	77人	
				生活の充実・向上をはかる教科	11人	
				健康で文化的な生活をおくるための教科	6人	
	役立つ教科	9%	40人	生活に役立つ教科	22人	
				将来役立つ教科	10人	
				自立することを助ける教科	8人	
	重要な教科	8%	34人	重要・必要な教科	26人	
				実用的な教科	8人	
	楽しい教科	8%	34人	楽しく学べる教科	30人	
				生徒の興味が湧く教科	4人	
	知識と技術を習得する教科	6%	25人			
	実習が多い教科	3%	15人	実習が多い教科	8人	
				実習・実践・経験を通して学ぶ教科	7人	
	すべての人が学ぶ教科	2%	8人			
女子が学ぶ教科	1%	3人				
他教科と比べて特徴のある教科	3%	16人	範囲が広い教科	6人		
			授業時数が少ない教科	4人		
			他教科と比べた家庭科の特徴	6人		
内容に特徴のある教科	1%	3人				
学ぶ内容のイメージ 33%	他者と共生して生きる 13%	共に生きることを学ぶ	1%	4人		
		命の尊さを学ぶ	1%	3人		
		人の一生を学ぶ	1%	5人	人の成長を学ぶ	2人
					人の一生を学ぶ	3人
		家族・家庭を学ぶ	6%	27人	家族の大切さを学ぶ	14人
					家庭を築き、守ることを学ぶ	3人
					家庭の役割と自分のできることを学ぶ	2人
					家庭で行うことを学ぶ	8人
		家庭と社会の関係を学ぶ	2%	8人	家庭と社会の関係を学ぶ	4人
					地域・社会で生活するのに必要なことを学ぶ	4人
	自分の将来をみつめる	1%	5人			
子どもの成長を学ぶ	1%	4人				
個人の生活の自立 20%	衣食住を学ぶ	20%	83人	食生活を学ぶ	45人	
				衣生活を学ぶ	29人	
				住生活を学ぶ	9人	
家庭科の授業感想	3%	12人				
家庭科の先生の印象	1%	3人				

表3 高等学校「家庭総合」の内容項目と家庭科で学ぶ内容のイメージの比較

高等学校普通教科家庭「家庭総合」の内容項目		家庭科で学ぶ内容イメージ	%	計%
		共に生きることを学ぶ 命の尊さを学ぶ	3% 2%	5%
(1) 人の一生と家族・家庭	ア. 人の一生と発達課題	人の一生を学ぶ	4%	32%
	イ. 家族・家庭と社会	家族・家庭を学ぶ 家庭と社会の関係を学ぶ	19% 5%	
	ウ. 生活設計	自分の将来をみつめる	4%	
(2) 子どもの発達と保育・福祉	ア. 子どもの発達	子どもの成長を学ぶ	2%	3%
	イ. 親の役割と保育	子どもを育てる	1%	
	ウ. 子どもの福祉			
(3) 高齢者の生活と福祉	ア. 高齢者の心身の特徴と生活			
	イ. 高齢者の福祉			
	ウ. 高齢者の介護の基礎			
(4) 生活の科学と文化	ア. 食生活の科学と文化	食生活を学ぶ	32%	60%
	イ. 衣生活の科学と文化	衣生活を学ぶ	21%	
	ウ. 住生活の科学と文化	住生活を学ぶ	7%	
	エ. 生活文化の伝承と創造			
(5) 消費生活と資源・環境	ア. 消費行動と意思決定			
	イ. 家庭の経済生活			
	ウ. 消費者の権利と責任			
	エ. 消費行動と資源・環境			

感想も含まれていると推測する。

(2) 生活経験

生活経験の設問は「他者と共生して生きる」と「個人の生活の自立」に大別した。「他者と共生して生きる」時の共生する相手を、①家族、②子ども、③いろいろな人、④地域の人、⑤文化を伝承する後生の人、の5分類で16問、「個人の生活の自立」を表す行動を、⑥食生活、⑦衣生活、⑧住生活、⑨生活管理、⑩経済概念、⑪情報収集、⑫地域の中の生活、の7分類で30問、合計12分類46問を設定した。(表4、図1)

全体平均は「A 経験がある・できる・知っている」が72%、「B 経験がない・できない・知らない」が28%である。12分類の中では、住生活(97%)、家族との共生(95%)の経験は豊富であるが、経済概念(53%)、文化の伝承(55%)、地域の中の生活(58%)は乏しい。

① 家族との共生

家族の職業は承知しており(100%)、家庭で仕事の話はしている(98%)。保護者から子ども頃の話や大人になってからの話は聞いており(94%)話題になる。保護者から聞かされるだけでなく、大人になるにつれて子どもから聞くようになる。家族のお祝い事は86%が実行し、プレゼント、食事、言葉で祝う。

② 子どもとの共生

子どもと遊んだ経験は96%と高いが頻度には差がある。小学校高学年から遊び仲間ではなく年上として年下の者と関わりをもつことを意識する。遊んだ相手は近所の子ども、弟妹の友達、いっこ、甥姪で、遊びの内容は室内では絵本、お話、お絵かき、屋外では鬼ごっこ、かくれんぼ、ボール遊び等である。同じ子どもと継続的に遊び面倒をみるのではなく、短時間の関わりである。遊んだ経験が中学・高校の保育

園・幼稚園実習だけの者もいる。赤ちゃんを抱っこした経験は69%と低い。抱っこしたことがない者は触感としての赤ちゃんを知らないことである。

③ いろいろな人との共生

お年寄りとの交流は77%あるが、中学・高校の授業で老人ホームを訪問してお年寄りと交流した経験も含まれる。お年寄りは老人ホームの入居者、祖父母の友人、近所の人等であり、内容は挨拶、日常会話である。長期的協同活動はない。子ども・お年寄り・体の不自由な方の手助けは68%が経験しており、席を譲る、駅構内の案内、歩行の手助け等、日常生活の咄嗟の対応である。ボランティアの経験は72%で、地域のゴミ拾い・清掃、お年寄り・子ども・障害者のお世話とお手伝い等である。自発参加もあるが、保護者に同行したり友達と参加したなど、他者がきっかけになった場合が多い。

ペット飼育は82%と高く、生き物との生活をしている。16%が犬を飼ったことがあり、以下金魚、ハムスター等20種類の動物の名前が挙がる。1家族で5種類以上のペットを飼っている家庭もあれば、動物は苦手という者もいる。ペットは家族全員が好きな家庭が飼うので、世話には関わっている。

④ 地域の人との共生

ひとり暮らしで54%、自宅通学者で25%が隣家の人数と顔の見分けがつかない。地域の仲間との交流はメールや電話で連絡するので会わなくても継続している(82%)。中学から私立なので地域に友達はいない、移転したので地域に仲間はいない者もいる。地域活動に参加する者は42%と低い。友達とお祭りには行くが、自治会等への参加はない。地域に友達がいるとお祭りにも行くという関連は、地域における同年代との交流は地域活動参加の条件になる。

⑤ 文化の伝承

先祖を祭る行事への参加は68%であり、自分の都合を優先して、時間があれば保護者に同行する。伝統的な季節行事の実施は64%である。実施する行事と実施しない行事、子どもの

頃は実施していたが今は実施しない行事もある。内容・方法とも定型ではなく家庭の応用型である。雑煮作りの伝承は、大まかには伝えられる者を含めても32%と低い。母や祖母と一緒に作ったことのある者は伝えられる。教えてもらいたい積極型から、見たことはあるが作ったことはない、家庭に伝わる雑煮の有無がわからない者もいる。家庭の料理を意識しておらず、家族から受け継いでいない。

⑥ 食生活

魚をおろした経験(58%)は高校の調理実習である。ひとりで天ぷらを揚げたことがある54%、糠床に手を入れる58%、梅酒・梅干をつくる44%である。危険な調理操作と手間のかかる家庭加工食品は敬遠される。加工食品の購入機会の多さと、健康と安全への関心から食品の表示には関心がある(82%)。家庭菜園は家族と一緒に作る者を含めて82%あり、ミニトマトを筆頭に25種類の野菜名が挙がる。食べ物の成育を観察し、収穫した野菜を食べる。

一人暮らしの学生の中に、やかん、急須、盆がない者がいる。やかんと急須にはペットボトルの代用物があり、食事を運ぶ必要のない狭い住空間と横並びの友達関係では食べ物を盆にのせて提供する必要はないという一人暮らし生活を象徴している。

⑦ 衣生活

洗濯機の使用経験はある(100%)が、毛製品の手洗い経験は低く(48%)、クリーニング店を利用する衣服管理の外部化がみられる。

⑧ 住生活

雑巾がけ(100%)、風呂(97%)・トイレ(95%)の掃除、布団干し(95%)の住生活に関する仕事は経験している。ただし床の雑巾がけは学校の清掃だけの者もいる。

⑨ 生活管理

金銭管理(80%)から、健康管理(68%)、安全管理(60%)、個人情報管理(45%)へと低くなる。金銭管理の内容は親からの仕送り、奨学金、アルバイト収入、小遣い等の管理であり、使い方には自己規制の意識がみられる。親

表4 生活経験

設問分類 (Aの平均割合)	番号	設問	A 経験がある, できる		B 経験がない, できない	
				%		%
他者と共生して生きる	① 家族との共生 (95%)	1 保護者や兄姉の職業(業種と職種)を知っていますか	知っている	100	知らない	0
		2 保護者の職業や仕事内容の話を聞いたことはありますか	ある	98	ない	2
		3 保護者が子どもの頃や若い時の話を聞いたことはありますか	ある	94	ない	6
		4 誕生日, 父の日, 母の日, 敬老の日等の家族の祝いを行いますか	行う	86	行わない	14
	② 子どもとの共生 (83%)	5 きょうだい以外の10歳未満の子ともと遊んだことはありますか	ある	96	ない	4
		6 1歳未満の赤ちゃんを抱っこしたことはありますか	ある	69	ない	31
	③ いろいろな人との共生 (76%)	7 祖父母以外の70歳代の方と交流したことはありますか	ある	77	ない	23
		8 子どもお年寄り体の不自由な方の助けをしたことはありますか	ある	68	ない	32
		9 ボランティアをしたことはありますか	ある	72	ない	28
	④ 地域の人との共生 (60%)	10 ペットを飼ったことはありますか	ある	86	ない	14
		11 隣の家の住人の人数と顔の見分けがつかますか	つく	55	つかない	45
		12 小学校・中学時代の地域の仲間と今も交流していますか	している	82	していない	18
	⑤ 文化の伝承 (55%)	13 地域のお祭りや自治会等の行事に参加しますか	参加する	42	参加しない	58
		14 彼岸やお盆等の先祖を祭る行事に参加しますか	参加する	68	参加しない	32
		15 節分, ひな祭り, 七夕, 月見等の季節の伝統行事を行いますか	行う	64	行わない	36
	個人の生活の自立	⑥ 食生活 (73%)	16 家庭に伝わる雑煮の作り方を伝えられますか	伝えられる	32	伝えられない
17 ホウレンソウとチンゲンサイを見て区別がつかますか			つく	94	つかない	6
18 リンゴの皮を丸ごとむいたことはありますか			ある	93	ない	7
19 魚を手開き, または三枚におろしたことはありますか			ある	58	ない	42
20 ひとりて天ぷらを揚げたことはありますか			ある	54	ない	46
21 糠漬けの糠床に手を入れたことはありますか			ある	58	ない	42
22 梅干, 梅酒, らっきょう漬のいずれかを作ったことはありますか			ある	44	ない	56
23 家庭菜園で野菜を作ったことはありますか			ある	82	ない	18
24 加工食品購入の際, 食材, 添加物, 消費期限等の表示を見ますか			見る	82	ない	18
25 家庭にまな板, 包丁, やかん, 急須, 盆はありますか			ある	92	ない	8
⑦ 衣生活 (74%)	26 洗濯機で洗濯をしたことはありますか	ある	100	ない	0	
	27 ウールのセーターを手洗したことはありますか	ある	48	ない	52	
⑧ 住生活 (97%)	28 床の雑巾がけをしたことはありますか	ある	100	ない	0	
	29 風呂の掃除をしたことはありますか	ある	97	ない	3	
	30 トイレの掃除をしたことはありますか	ある	95	ない	5	
⑨ 生活管理 (67%)	31 布団を干したことはありますか	ある	95	ない	5	
	32 小遣いまたは生活費の金銭管理をしていますか	している	80	していない	20	
	33 自分の健康管理をしていますか	している	68	していない	32	
	34 防犯, 防火等の安全管理をしていますか	している	60	していない	40	
⑩ 経済概念 (53%)	35 個人情報の管理に注意をしていますか	している	45	していない	55	
	36 自分の住民票を見たことはありますか	ある	81	ない	19	
⑪ 情報収集 (68%)	37 通信販売を利用したことはありますか	ある	81	ない	19	
	38 新聞1ヶ月の購読料を知っていますか	知っている	25	知らない	75	
⑫ 地域の中の生活 (58%)	39 インターネットと携帯電話は情報源として必須ですか	手放せない	72	そうでもない	28	
	40 新聞は読みますか	読む	64	読まない	36	
	41 地域の生まごみと可燃ごみの収集曜日を知っていますか	知っている	58	知らない	42	
	42 地域のゴミの分別種類を知っていますか	知っている	48	知らない	52	
	43 居住地の区市町村役場がどこにあるのか知っていますか	知っている	82	知らない	18	
	44 居住地管轄の交番がどこにあるのか知っていますか	知っている	63	知らない	37	
	45 都道府県・区市町村が発行している自治体広報誌を読みますか	読む	48	読まない	52	
	46 居住地に近い社会福祉施設を知っていますか	知っている	46	知らない	54	

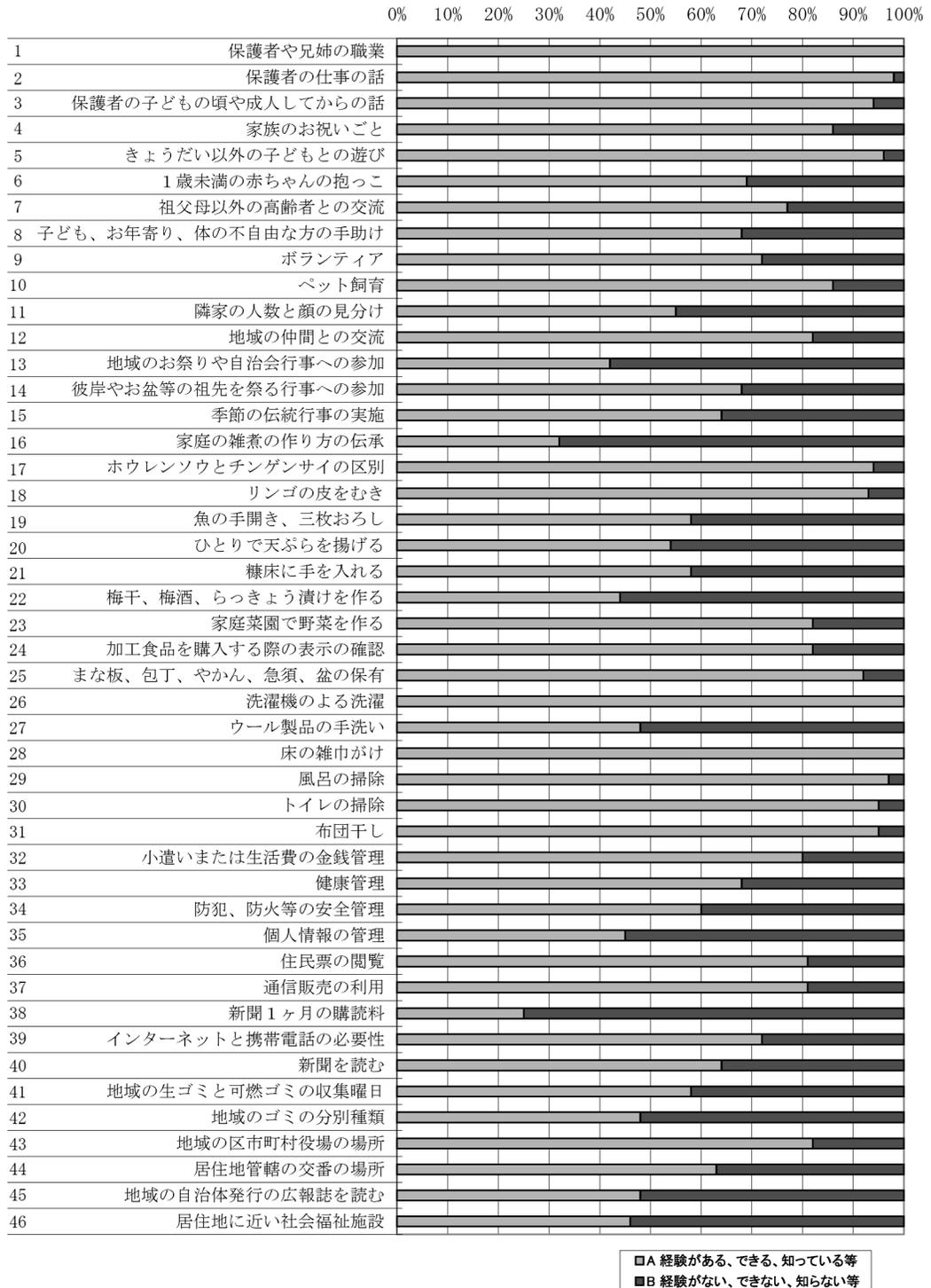


図1 生活経験

からもらうので金銭管理はやらない消費者問題予備軍もいる。健康管理は食事、運動、規則正しい生活に配慮している。食生活の不規則は気になるが実践できないジレンマもある。安全管理は防犯、火気、ガス、災害等に気を配っているが、集合住宅の設備過信、親がしている等の注意不足の面もみられる。個人情報の管理は廃棄に気をつける、安易に書かない、漏らさない等を実行している。何をしたらいいのかわからない者もおり認識は低い。住民票の閲覧は81%であり、生活に関わる役所書類の閲覧機会は少ない。

⑩ 経済概念

通信販売の利用は81%であり、小学生時代から利用を開始し、中学生、高校生と増加する。大学生は利用品目の拡大とネット販売の利用が特徴である。利用は頻繁に利用する者から年に数回という者までおり、購入品目は服、靴、アクセサリ、雑貨等の個人物である。

新聞の購読料を知っている者は25%と低く、知っている者の金額も大まかである。経済概念は個計の範囲で、家計に関わっていないので関心は低い。

⑪ 情報収集

インターネットと携帯電話は情報源として手放せなく不安(72%)である。そうでもない者(28%)も、煩わしいこともあるが、あれば便利と感じている。新聞は読まない(36%)。読む頻度は毎日読むからたまに読むまで、読み方は全ページではなくテレビ欄を筆頭に興味のある欄を部分的に読む。インターネットと携帯電話は新聞に比べて情報源として頼りになる必需品である。

⑫ 地域の中で生きる

地域のゴミ捨ての規則は、数が多く覚えられないがある程度は知っている者も含めて、可燃ゴミの回収曜日58%、分別種類48%と低い。知っている者は曜日、分別種類とも知っている。家族が行うので知らない者もあり、ゴミ問題への対応行動は低い。居住地の役場を知らない(18%)、交番を知らない(37%)。自治体

の広報誌は読まない(52%)だけでなく存在を知らない者がいる。社会福祉施設を知っている者(46%)は少ないが、知っている者は施設の目的を理解している。

Ⅲ 家庭科観と生活経験の関連、および現状と問題点

Ⅱ章の「家庭科観」と「生活経験」の調査に基づいた考察から、家庭科教職課程履修学生の家庭科観と生活経験に関連する現状と問題点を述べる。

1. 「生活」の範囲が狭い

家庭科のイメージは「生活に必要で役に立つ大切なことを知識と技術をとおして学ぶ」であり、生活に関係のある教科ととらえている。

「生活」という言葉は、生活する、生きていく、という進行形の生活であり、「役に立つ」という言葉は、自分の自立と将来の生活に役立つと認識している。しかし、具体的に表現された生活は、日常生活、家庭生活、自分と家族の今の生活という狭い範囲の生活である。自分や家族の一生の生活、後世の人々の生活など長期将来的な生活は範疇にない。また共に生活する他者は主に家族であり、家族以外の地域や社会の他者との生活、異世代の人との生活を意識している者は少ない。したがって、長期的な生活と家族以外の人との生活の認識は低く、漠然とした今の家庭生活が家庭科の「生活」の範囲ととらえている。

2. 学ぶ内容の偏り

家庭科で学ぶ内容のイメージは、「家族・家庭」「食生活」「衣生活」が3大項目で、内容意識に偏重がある。「人」を中心に家族や家庭考える家庭科が浸透した面と、従前の食物と被服に代表される生活資材と技術に重点をおいた「物」のイメージが残存する新旧両面の特徴が表れている。

3. 生活経験と家庭科内容のイメージの関連

生活経験の12分類を家庭科で学ぶ内容のイメージと比較する。(表5) ①家族との共生、

表5 生活経験と家庭科で学ぶ内容のイメージの関連

生活経験				家庭科で学ぶ内容のイメージ	
共生	自立	設問分類	表4のA経験がある, できる, 知っている, 等の平均割合		割合
				共に生きることを学ぶ 命の大切さを学ぶ	5%
	○	⑧ 住生活	97%	住生活を学ぶ	7%
○		① 家族との共生	95%	人の一生を学ぶ 家族・家庭を学ぶ 家庭と社会の関係を学ぶ 自分の将来をみつめる	32%
○		② 子どもとの共生	83%	子どもの成長を学ぶ 子どもを育てる	3%
○		③ いろいろな人との共生	76%		
	○	⑦ 衣生活	74%	衣生活を学ぶ	21%
	○	⑥ 食生活	73%	食生活を学ぶ	32%
	○	⑪ 情報収集	68%		
	○	⑨ 生活管理	67%		
○		④ 地域の人との共生	60%		
	○	⑫ 地域の中の生活	58%		
○		⑤ 文化の伝承	55%		
	○	⑩ 経済概念	53%		

⑥食生活, ⑦衣生活は生活経験があり, 学ぶ内容のイメージも豊富である。②子どもとの共生, ③いろいろな人との共生は, 生活経験はあるが学ぶイメージは低い。⑪情報収集, ⑨生活管理, ④地域の人との共生, ⑫地域の中の生活, ⑤文化の伝承, ⑩経済概念は生活経験も乏しくイメージもない。⑧住生活は生活経験が高いがイメージは低い。生活経験が豊富であると家庭科の内容をイメージしやすく, 生活経験が乏しいとイメージできないことから, 生活経験の有無と家庭科学習内容のイメージは連動する。

4. 生活経験と生活体験の違い

生活経験への媒体者は家族, 友達, 学校の先生である。保護者や祖父母の行動は, 見た経験, 協同経験として残る。家族が生活行為を子どもに見せることは, 経験の入り口として重要な役目を果たす。学校が計画した幼稚園や老人ホームにおける子どもやお年寄りとの交流は体験したことではあるが, 「子どもの発達と保

育・福祉」や「高齢者の生活と福祉」を家庭科の内容としてイメージできないことから, 受身体験に留まり生活経験には熟達していない。生活経験は反復行動の蓄積から自分のやり方できるようになった結果である。

5. 「できること」と「できないこと」の二極化

生活経験有無の開きが大きい。今の生活に必要な関心のあることはできるが, 今の生活に必要なのない, 生活の変化により陳腐化したことと, 代替者がいるので自分でやらなくても済むことはできない。代替者は家族と生活の社会化を支える社会的機能である。生活経験の中に学校だけの体験が含まれており, 生活経験場所は家庭・学校・地域に拡散している。

6. 「できる人」と「できない人」の二極化

生活経験の平均は, およそ4人に3人が「A経験がある・できる・知っている」であり, 1人が「B経験がない・できない・知らない」こ

とになる。生活経験の豊富な者とそうでない者、および、経験の頻度と内容には個人差がある。生活経験の豊富な者は家庭科のイメージや内容の把握もよく具体的表現をするが、生活経験の少ない者はイメージが貧弱で抽象的である。

7. 他者依存の生活態度

生活経験の乏しい者は、今の生活に関係がないのでできなくても困らない、だからやる必要はない、したがって「経験がない・できない・知らない」ことになる。家族が行う生活行為に参加せず、家族にお任せの消極的他人依存の生活態度である。

8. 地域の生活者ではない

地域の中で生活していくための情報と規律の理解が低い。家庭生活と地域・社会の連結部分の生活経験が薄く、地域の生活者ではない。家庭と地域・社会は運動していることを知識では理解しているが、地域の人との交流は主に同年代であり異年代との交流は少ない。しかし、保護者、祖父母、きょうだいは地域の異年齢他者との媒体者となるので、家族との同一行動は地域参加につながる。

9. 他者理解が浅い

子ども、お年寄り、地域の人との交流には偶然や自然発生的な交流と、体験活動やボランティアの意識的交流がある。自然交流の機会が少ないので体験交流を窓口にして発展を期待している。自然交流、体験交流とも継続的長期的交流ではなく、断片的短時間の交流である。子ども、お年寄りともお話や遊び相手、お世話等の行動を伴う交流で、他者理解の大切さに気づきはしているものの、心の交流には浅い。

Ⅳ 生活経験を豊富にするための家庭科教育の視点

家庭科は生活に必要で役に立つ教科であるというイメージだが、生活の範囲は狭く、実習を伴い知識と技術が習得できる教科であるというイメージだが、生活経験は乏しい。教科のイメージと生活実態に不釣合いがみられる。しか

し、生活経験があると家庭科の内容はイメージしやすいことから、教科内容のイメージと生活経験は関連するので、教科観構築にあたり生活経験の豊かさは重要な要素である。個人の自立と他者との共生ができる生活者であるうえに、教科観をもつ家庭科教師に成長するためにも生活経験は重要である。

以上から生活経験を豊富にすることは、自分と共生する人々の生活に必要で役に立つ知識と技術は何なのかに気付かせることができる。それは、教師として生徒に何を伝えることが必要で役に立つことなのかを考えることでもある。経験をとおして生徒に伝えたいことを自ら発信できることは、教科観、指導観、教材観、授業観、生徒観の拡張につながり、実践力と責任をもつ教師に成長できる。

Ⅲ章の「家庭科観と生活経験の関連、および現状と問題点」を克服し改善するためには、生活経験を豊富にして、生活視野を拡大することを意図した大学の家庭科教育が必要であると考える。その視点は以下のとおりである。

1. 生活経験を豊富にする

① 体験と知識を合わせて経験にする

数少ない体験と乏しい生活経験を補うために書物やインターネットで知識を得るが、経験が乏しいので知識が理解できず、知識も浅いので経験も拡張できない。知識と経験が乖離したまま、抽象的理論的な講義授業、もしくは生活の一部を切り取った生活体験授業という両極端の授業に陥る。したがって知識を具体化する体験と、体験を応用できる知識の両面から生活事象の理解に努めることが望まれる。体験と知識の融合が生活経験として生きる。

② 積極的生活体験に移行する

家族、友達、教師等の体験媒体者の存在を利用して、受身体験から積極的体験に移行する。自発的体験は知識獲得の要因になり、体験を経験に熟達させる。

③ 経験の過程を経る

できない→みる→一緒にする→ひとりのできる、の過程を積むことにより、できないからで

きるに至るまでを体験する。子どもとして保護者や友達、地域の人と行った協同生活体験は、自分が成長して親や教師になった時に家族や地域の子ども、生徒と一緒に体験を試みようとする意識行動を促す。経験の段階を踏むことは、できるようになったことを教えられるようになる自己消化と創意工夫を生む。

④ 生活経験から教材を発見する

生活の中で経験したことを工夫して教材化する。例えば、ペット飼育を命の大切さや人の一生、子育てに、野菜栽培を食糧資源や食品流通に、通信販売を経済生活の自立や消費者の自覚に、掃除を住居の衛生や家事労働に、親子・家族会話を家族理解や他者理解につなげる、などが考えられる。

⑤ 他者との交流を豊かにする

家庭内での役割が変化して、子どもの立場から親の立場になっても、他者との意思の疎通を優先する。また世代性別を越えた多様な他者との交流に努める。ひとりの人と長く接すること、多くの人と接することを経験する。ひとりと長期的に接することは個人理解を深め、多くの人と接することは多様な他者の存在を認知できるので、双方とも他者理解につながる。

2. 生活視野の拡大

① 「人」を中心に長期的生活を視野にする

自分の生活から他者の生活へと、自分の一生から延長する他者の生活へ視野を広げ、それらの「人」の生活に関わる「物」との関係性を範疇にする。

② 家庭から社会をみる目と、社会から家庭をみる目を養う

生活の範囲と接する人は家庭から地域、社会に拡大されて複雑になる。家庭科は家庭生活が基盤なので家庭→地域→社会の拡大構図になる。これは生徒の成長段階に即した学びの方向性であるが、加えて家庭科教師は、地域や社会を構成している家庭の役割に着目し、地域や社会と家庭の関係を社会→地域→家庭の視点からとらえる、両方向からの視点が必要である。

③ 生活主体としての自覚をもつ

生活主体として生活意識の向上を図る。できる限り他者に依存することなく自立し、積極的に生活に介入する。

④ 家族と社会への甘えを絶つ

家族に生活行為の代替を依存している。生活の社会化を支える社会的機能との連結部が細く、地域・社会へ発信も、地域・社会からの受信も弱い。家族・地域・社会への依存を解消する。

⑤ 補完作用と循環作用

生活者としては、個人の生活が自立できると、他者との共生が円滑になり、他者との共生を円滑にするには、個人の生活の自立が要求される。個人の生活の自立と他者との共生は相互に補完作用がある。

家庭科の教師としては、生活経験は自分育ての機会であり、その成果は生徒育てを可能にし、生徒育ての経験と自信は自分育ちに還元される。自分育てと生徒育てには循環作用がある。

⑥ 一人暮らしのすすめ

保護者から離れて、個人の生活の自立と他者との共生を実践する一人暮らしは、生活者+家庭科教師として自信と責任を育てる生活そのものである。

Ⅵ ま と め

家庭科の教職課程履修学生の家庭科の教科観と生活経験について意識と実態を調査した。その結果は次のとおりである。

①家庭科のイメージは「生活に必要で、役に立ち、重要で、楽しく、知識と技術を習得する、実習の多い教科」である。

②「生活」の範囲は今の自分の生活であり狭い。

③家庭科で学ぶ内容のイメージは、「家族・家庭」「食生活」「衣生活」の3項目であり内容認識に偏りがある。

④生活経験と家庭科内容のイメージには関連があり、生活経験を豊富にすることは教科観の構築につながる。

⑤生活体験が生活経験に至っていない。

⑥できることとできないこと，とできる人とできない人の二極化がみられる。

⑦他者依存の生活態度である。

⑧地域の生活者ではない。

⑨他者理解が浅い。

以上の状況の学生が，教科観，指導観，教材観，授業観，生徒観をもつ家庭科教師に成長するためには，生活経験を豊富することから生活視野を広げて，自分の生活を確立することと，他者の生活を理解する必要がある。その過程は自分育てと他者育て（生徒育て）を可能にする。したがって生活経験は家庭科教師にとって大切である。

そこで，生活経験を豊富にして生活視野を拡大するために，大学の家庭科教育では下記の点に重視する。

①体験と知識を合わせて経験にする

②積極的体験に移行する

③経験の過程を経る

④生活経験から教材を発見する

⑤他者との交流を豊かにする

⑥人の長期的生活を視野にする

⑦家庭から社会をみる目と，社会から家庭をみる目を養う

⑧生活主体の自覚をもつ

⑨家族と社会への甘えを絶つ

⑩自分育てと他者育てを並行する

⑪一人暮らしのすすめ

本研究の結果を大学の授業内容に反映させることが今後の課題である。

参 考 文 献

- 阿部睦子，深澤千聡，葦塚節子，森本静子，亀井佑子，三野直子「中学生にみる家庭科学習に対する意識」『日本家庭科教育学会誌』第49巻 第1号 2006年4月 pp. 3-9
- 日本家庭科教育学会編『家庭科で育つ子どもたちの力（家庭生活についての全国調査から）』明治図書 2004年7月
- 岩永雅也，稲垣恭子「新訂教育社会学」放送大学教育振興会 2005 pp. 44-48
- 近藤清華，佐藤文子「大学家庭科教員養成カリキュラムの現状と課題（第1報）—高等学校家庭科教員の教科内容・指導に関する認識・実態—」『日本家庭科教育学会誌』第49巻 第1号 2004年4月 pp. 3-9
- 近藤清華，佐藤文子「大学家庭科教員養成カリキュラムの現状と課題（第2報）—シラバス分析から—」『日本家庭科教育学会誌』第49巻 第1号 2004年4月 pp. 10-16
- 綿引伴子，鶴田敦子，福留美奈子，堀内かおる，上里京子，高木直，今野智津子，小島郷子「中学校家庭科教員の実態と家庭科の指導に関する意識の関連—指導計画および指導観」『日本家庭科教育学会誌』第45巻 第2号 2002年7月 pp. 141-151